不本意ながら魔王やってます

神伝　遥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
不本意ながら魔王やってます

【Ｎコード】
Ｎ３６６２Ｇ

【作者名】
神伝　遥

【あらすじ】
親を超えるために村を出た（追い出された）メンテイン・クロムハートフィル通称クロムもしくはフィルはその頼まれたら断れない性格と神に見放されたと形容しても良いほどの運の無さが災いし国内最上級犯罪者、魔王クロムハートフィルと呼ばれることになる。果たしてクロムが町を堂々と歩ける日が来るのか。舞台は剣と魔法となんやかんやと※作者でも予想外の展開になるやも知れません

プロローグ　幸福の絶対量は常に少ない

~日暮れ時のある町近くの森の中にて~

「はぁ、今日も野宿かぁ。」
黒いコートを着た少年は森のど真ん中でそんなことを呟いた。
故郷の村をでて、（正確には追い出されて）早五年。後、五年でもう二十になるというのに、今だ帰る家どころか、帰る村も町も無いとは、悲しすぎる。
全く持って人生は不公平だ。金ならあるというのに、僕を泊めてくれる宿は存在しない。
何故なら・・・

しかしそこで思考をいったん中断することになる。
何やら騒がしい。最近この辺りでは盗賊がでると言う噂を聞いたが・・・とりあえず、現場に行ってみることにする。

「荷物を置いて去れ、命だけは助けてやる。」
馬車の周りを十五人ほどの男が取り囲んでいた。今、喋っている奴がおそらくリーダーなのだろう。あまり気が進まないのだが、僕は愛用の双剣を手に飛び出した。

「おい、盗賊ども今すぐ立ち去れ！」
自分でもびっくりするぐらい棒読みだ。
「何だ、小僧お前一人で何ができる？」
「いいから、切りかかってくるとか、何かしてくれないか。早く済ませたいんだ。」

「く、生意気なやっちまえ。」
その言葉とともに幾人かが飛び掛ってくる。
だが僕は避けようともしなかった。
目の前まで迫っていた、刀やら、斧やら、短剣やらは見えない障壁にはじかれ僕には届かなかった。
「お、お前まさか魔術師か？」
「残念、外れだ。」
少年はそこで始めて動きを見せた。双剣はいつの間にか電撃のようなものをまとっている。
少年に切りかかった者達は、反応も見せる間もなく倒されてしまった。
「相手は一人だ。落ち着いてあたれば勝てるぞ！」
男の声で浮き足立っていた盗賊たちは落ち着きを取り戻した。

「降参してくれないか？」
返答も無しに切り掛かって来た。どうやら降参する気は無いらしい。
僕は本日二度目のため息をつくと、すぐそこまで迫っていた盗賊Ａの斬撃を受け止め、刀越しに電気を流す。
（まず一人っと、さてそろそろこっちから行くか。）
その場から横へ飛び退き、盗賊Ｂの斬撃を避ける。
左の剣で盗賊に触れ気絶させる。
（これでもまだ半分も残ってるのか、面倒だな。）
僕は双剣をしまう。

「どうした降参するのか？」
「いや、どうもめんどくさくなってね。」
その言葉とともにコートの袖に光が収束され始める。
「黒いコートに、光属性の魔法、ま、ま、まさかお前は」
皆まで言い終える間もなく光が瞬間的に伸びて盗賊たちを拘束する。
そしてそれと同時に盗賊たちは気絶させられた。

「ふう、これで終わりかな。」
青年は光の魔手を消しながら言った。
馬車の中を見ると三人の男たちが震えていた。
「あの」
男たちは驚きこっちを見た。
「大丈夫ですか。」
「俺たち助かったのか？」
「はあ、よかった。」
皆、安堵の顔をしている。

「お前が助けてくれたのか？」
「まあ、そうですけど」
「馬鹿な、まだ子供だろ。ありえない。」
（一応、もう十五だぞ）
「灰色の瞳・・・」
その言葉で皆が沈黙した。
（そうか、もう夜だからゴーグル外してたんだった。失敗したなぁ）
「ま、魔王、お前魔王なのか？」
つくづく運が無い、最初に刃弓の盗賊団を討伐してから、何故か僕はその仲間に間違えられて、その後度重なる不幸が続きいつの間にか魔王クロムハートフィルと呼ばれるにいたる。
早い話が国家に背く大犯罪者と言うわけで、町に行けば警備隊が出てきて即刻逮捕。もちろん故郷にも帰れない。
噂は幅広く浸透しているようで、そのお陰で現在進行形で僕は困っている。
「どうか命だけは、何でもしますから。」
（そもそも殺す気無いんだけど。）
「何でもしてくれるの？」
「はい、もちろんです。」
「じゃあ、一週間分の食料を頂戴・・・あと外の人たちの処理も頼

むよ。」
「えっと、それだけですか。」
「何か不満かな？」
「いえ、とんでもない」
食料を受け取ると僕はその場を後にした。

プロローグ　幸福の絶対量は常に少ない（後書き）

小説初挑戦です。これから面白くなるはず。目標は超えろ二十話以上です。

第一章　臨時パーティ結集（前書き）

途中から、ラッディクオークと書くのが面倒になりました。

第一章　臨時パーティ結集

僕は森を東に向かっていた。本当は西の村に寄りたかったのだが、昨夜のこともあり警戒されているかもしれない。
そのため僕は当初の目的を変更し、ヨーホルンの廃鉱に向かうことにした。

廃鉱とは言っても、実はまだ十分採掘可能である。問題は最近になって増えた魔物の方だ。
何故そんな所に行くかと言うと、魔石を採るためである。

何を隠そうこの僕はなんと魔具職人なのだ。普通、素材を確保するには商人などに注文するのだが、生憎僕は犯罪者だ。しかも、国内最上級犯罪者だ。
と言うわけで素材の確保も命がけ、親父を超せる日は何時になるやら。

しかし、国内最上級犯罪者になった、なんて言ったらなんていうだろう？
おそらく親父は『おまえがまさか犯罪の道で俺を超そうとすると思わなかったぜ。まあ、確かに魔具士として天才の俺を超そうと思ったら、一生無理だもんな。何でも魔王って呼ばれてるんだっけ？俺を超すにはせめて、国の一つや二つぐらい軽く落としてもらわないとな。ガッハッハッハ。まあせいぜい頑張れよ。』とか言いそうだ。

人としての常識が欠落しているとしか思えない。
そもそも、村を追い出された時の言葉が『親としての愛を持ってここに宣言する。

あと十年で俺を超えて来い。
よし、とりあえず魔物の巣窟とか言ったか？冥界の穴とか言うこの世でもっとも深く危険な場所で、そこに言ったら帰ってこれねぇって言う穴があるらしい。そこの最下層に転移させてやるからよじ登って出て来い。十年したら帰って来いよ。じゃな！おっと、もし無名のまま死んだらの話だが、冥界から魂引きずり戻して千回殺した後、俺じきじきに鍛えてやる。だから安心しろ。じゃあ、悪名でも何でも良いから伝説になって来いよ！！』だ。

あの時は死にそうだったぞ。まあ、あの時の経験が無かったらもう生きていないだろうが・・・

実際、親父は人間離れしている。十一の属性魔法をマスターし、この世界最強の戦艦ノールドフェリアをたった一人で完成させた挙句、災厄と呼ばれた黒の神パンドラをこの世から消滅させたのだ。この世界で父の名を知らないものはいない。

もちろんそんな英雄の子だ。回りからも僕は期待されていたらしい。しかし、父に比べ僕が扱えるのは光属性と無属性のみ、しかも無属性は魔力量が極めて少ない。魔具の作成ではさまざまな属性を用いる。属性の数＝技術といっても過言ではない。つまり、僕は魔力総量こそ父以上に高いが、魔具士としては落ちこぼれなのだ。

それでも僕はあきらめない。光以外の魔石を生成できなくてもこうして自分で採掘すればいいのだ。
ちょうど、タイミングよく廃鉱についた。

「真っ暗だな。」

廃鉱なので当たり前なのだが・・・

ゴーグルが自動的に光量を調節したお陰で奥の方まで見えるようになった。
瞳が灰色なせいか、僕の目は光に弱い。直接太陽を見るとしばらく目が見えなくなる。
親父の作品だと言うのが気に食わないが、このゴーグルには色々と助けられている。

「さてと、あれを使うか。」
空間魔法を利用した、布袋から魔力検知器を取り出す。
「ん、ふむ入り口だからこんなものか。おや？」
どうやら僕以外にも人がいるらしい。
魔力検知器によると少し先らしい。会いたくないが、しばらく一本道だ。
（しょうがない、何食わぬ顔で追い越そう。）

クロムは廃鉱の奥へと進んで行った。

そのころ、廃鉱の奥には大きなオノを持った戦士風の男と、剣士風の中性的顔立ちをした男、白いローブをまとった魔法使い風の女性が歩いていた。

斧を持った男が震える声で言った。
「なあ、セインやっぱり引き解さないか。」
一歩歩くたびにカンテラの明かりが揺れ怪しげな陰を作り出す。自らのカンテラ以外明かりは無く目の前の暗闇からは今にも何か飛び出してきそうだ。
セインはなにかうそ寒い物を感じながら口を開いた。
「ジェス、何回も言ってるだろう。この依頼は途中であきらめると契約違反でギルドからの罰金が発生する。つまり金が無くてこの依頼を選んだ僕たちには・・・」

「違反金は払えない。そうでしょ？」
「ああ、そうだ。」
「だけど、よう。ここむちゃくちゃ幽霊でそうじゃん。俺そういうの苦手だって知ってるだろ？それに廃鉱内の魔物を一掃しろなんて三人でできるわけないじゃん。」
「依頼には複数パーティ受注可となっていた。他にもいるだろう、たぶん。そもそも、この依頼を受けようと言ったのはお前だろ。」
「二人とも静かにして、何かが近づいて来る。」
「何かまではわからないかのか？」
「残念ながら。」
「ぜってー幽霊だ。やっぱりいるんだよー。悪霊退散、封魔破邪」
「って、泣くなよ男の癖に。」
「だから静かにしてって言ってるでしょ！」
（ジェス、幽霊と怒ったマリアどっちが怖い？）
（そりゃ、マリアに決まってるだろ。）
「何こそこそ話してるの？」
「なんでもないです！」

ジャリ　ジャリ

（足音、魔物が迫ってるのかも。）
（そうだな一人でこんな所来るとは思えない。）
（よかった幽霊じゃない。）
それぞれ緊張した面持ちで得物をかまえた。

しかし、暗闇から現れたのは黒いコートを着た少年だった。
そして少年はそのまま奥へ向かっていく。

「お、おい。ちょっと待て。」
あわててセインが呼び止めるが、そこで少年は急に駆け出した。

「皆、どういう理由があるにせよ、ほおって置けない。追うぞ。」
「任せとけって。」
「了解よ、リーダー。」

もう二、三分は追いかけているだろうか

「あいつ、足はえーな、マリアもセインも大丈夫か？」
「なんとか」
「右に同じく。」
しかし、少年の逃走劇は唐突に終わりを告げた。
「ん、あいつ止まったぞ、あきらめたか？」

その頃、少年ことクロムは・・・

「まだ、追ってくるか・・・」
急に開けたところに出る。
「これは、ラッディクオークか。なんて数だ。」
そこには、壁が動いているのではないかと思うほどの魔物がいた。
少なくとも二、三十匹はいる。巨大な牙を振りかざして穴を掘っていた。暗闇だから分からないが、赤黒い甲殻はかなり硬い、剣に電撃を纏わせたぐらいじゃ利かないだろう。

「しょうがない、あれを使うか。」
双剣に魔力を通す。
僕が製作した、この双剣の正式名称はクロム式爆発機械双剣Ｍ－０１５６型、名前の通りこの剣は目的に応じ、埋め込まれた魔道機関を利用して二種類の爆発を引き起こす。

一つは・・・
ラッディクオークが飛び掛ってくる。右手の剣を振ると相手に当

たった瞬間爆発を引き起こした。
ラッディクオークの甲殻は粉砕し壁に叩き付けられた。
このようにダメージを与えるため前方に放つ爆発。

そしてもう一つは・・・
そのままの勢いを利用して、そばの二体に切りかかる。
僕の意思に応じて片刃の切れない方から爆発が噴射される。
そして二対をそれぞれの剣で両断する。
爆発を推進剤として利用して威力を高めるいわゆるブースター

ラッディクオーク達をかなり刺激してしまったらしい。かなり怒っているようだ。十体ほど同時に飛び掛ってくる。
（さすがに双剣でもこの数はさばききれない。なら）
クロムは双剣を水平に縦に並べて構える。そのまま回転＆ブースター＆前方爆発
飛び掛ったラッディクオーク達はあえなく撃墜された。
多少めまいがする。百五十六回の改良で、僕とともに成長してきたこの双剣に弱点は無いと言い切りたいのだが、生憎、耐久力の問題でそう何回も使用できない。
残りのやつ等はどうしたものかと困っていると、ようやく三人組が到着したようだ。

「おい、大丈夫か。僕達も加勢する。」
厚意は有難いのだが、ラッディクオークには剣やオノでの攻撃は利きにくい。魔法なら余裕なのだが、おそらく魔法使いも補助専門ぽい。あまり期待しない方が良いかもしれない。
「うらうらうらうらっ」
ジェスは斧を振り回しながら魔物の群れに突撃する。
（斧の大きさからある程度の破壊力を予想していたが、予想以上だ。簡単に魔物たちを吹き飛ばしている。）

「僕も行くか。」
セインは、そう言うと剣に冷気を纏わせる。
(魔法剣士っしかも構築型か)
セインつぎつぎと魔物たちを凍らせていく。
「火の精霊よ、その強き力を彼の者達に分け与えたまえ、土の精霊よ、その偉大な力を持って彼の者達を守りたまえ。ハイルート　プロテクス」
(二重詠唱での補助魔法かこの三人強い。)
集まっていた、ラッディクオーク達は数分ほどで殲滅された。

「うー、疲れた。」
「久しぶりに運動したなぁ。」
「なんで、ジェスはそんなに元気なのよ?」
「そうだよさっきまで震えてたくせに。」
「そりゃ、戦士だからな。体力には自信がある。」
「そんなことより、君は何でこんな所に?」
(正直に話せる訳は無いよなぁ。よーし・・・)
「あの、えーと。僕はクロロ・フィルと言います。ここから西に行った村に住んでいるのですが、妹が病気でこの辺りにはこの洞窟にしか生えない陰影草と言うものが必要で・・・」
「それなら、冒険者ギルド頼めば良いじゃん」
(ジェスだったか、余計なことを)
「恥ずかしいことにお金が無くて」
「その割には結構高そうなコート着ているよね。」
「えっと、それは・・・」
(余計なことを・・・)
「セイン、疑うのはよせ、妹さんのためにこんなとこまで来てんだ、泣ける話じゃねーか。」
「ジェス、あなたはもう少し人を疑うことを覚えた方が良いわよ。でも、まあ確かに可哀相ねぇ。」

「ジェスもマリアもそこまで言うなら、クロロだっけ、僕たちが陰影草を探してあげるよ。図鑑で見たことあるし。」
「そんな、有難うございます。でも、場所までは分からないですよね？大体の場所なら分かります。やっぱり僕も行きます。」
「でもなぁ、さすがに君を守りながらは戦えないよ。」
「大丈夫です。自分のみぐらいは守れます。」
「良いじゃないか、セインさっきの戦いで腕も分かったし。」
「うーん、よし分かった一緒に行こう。」
「有難うございます」
（まったく面倒なことになった。この先どうするか。）
（うーん本当に大丈夫かなぁ。）

それぞれの思惑が渦巻く中一行は先へと進んでいくのだった。

第一章　臨時パーティ結集（後書き）

次回、いよいよボス登場（かも）。よろしければ感想、希望等もお願いします。

第二章　地中の女王

「おい、セイルそっち行ったぞ！」
「分かってる。」
体格の大きいジェスがまず魔物たちを押しとどめ、取りこぼした魔物をセイルが対処する。
さらにその後ろに控えたクロロが魔物に追い討ちをかける。
一番後ろのマリアが回復や補助を引き受ける。
狭い坑道内では二人以上並ぶことができない。そのため、このような並びになったが、これがなかなかに効果的だった。
「マリアそろそろ回復を頼む。クロロ大丈夫か！」
「はい、何とか。」
「分かってるけど、そろそろ、魔力が底を付くわよ。」
狭い坑道のおかげで大量の敵を一度に相手にする事は無くなったが、持久戦になることは否めない。
「何でラッディクオークばっかこんなにいるんだよ！」
（確かに単体での繁殖力の低いラッディクオークがこんなにいるのはおかしい。考えられるとすればあれか。）
クロロ改めクロムは何か考えることがあるようだが、敵は待ってくれない。
セイルの魔法剣によって体の一部を凍らされたラッディクオークが飛び掛ってくる。
まさか、避ける訳にもいかないのでブーストで威力を底上げした一撃を放つ。
十分後
「ようやく終わったか？」
「さすがに疲れたぜ。」

「私、もう無理。」
セインとジェスはまだ余裕があるようだが、マリアは魔力が尽きてしまったようだ。
「しかし、お前の双剣すげーな。どこで手に入れたんだ？」
「実は、父が魔具職人で死んだ時に残してくれたものなんです。コートもですけど・・・」
我ながら、演技がうまいと思う。
「なんか、悪いこと聞いたな。」
「いや、昔のことです。」
いや、ほんとに死んでくれれば良いのに。
「さすがに今回は撤退するしかないか。」
ぽつりと言ったセインの言葉にジェスは猛反対する。
「おい、陰影草はどうすんだ？少なくともそれは見つけないと。」
「だが、マリアがあんな状況だし予想より、はるかに魔物が多い。もう一度で直そう。」
「皆さんは帰ってください。僕一人で探します。」
（チャンス、この辺りでも精鋭度C以上の魔石がでるはず。このまま帰ってもらって、採掘して僕も帰ろう。）
「そんな訳には・・・」
セインの言葉をジェスが遮った。
「セイン、お前はマリアを連れて先に帰れ。俺はこいつと行く。」
「そんな無茶だ。」
（ホント無茶だ。）
「なあ、セイン。こいつには命をかけてでも救いたい奴がいる。そのための覚悟もある。するべきときにするべきことをしない奴は必ず後悔する。なあに、こいつの腕は十分見ただろ？一人なら無理だが、二人なら帰ってこれるだろ。臨時とは言え仲間だ。仲間は絶対見捨て無い。俺のするべきことはこれだってはっきり分かってんだ。だから俺はこいつを、お前はマリアを守るんだ。いつだってそうだっただろ？」

「ああ、いつだってお前は一番馬鹿な選択をする。の癖にいつだって生き残るんだ。お前はお人好し過ぎるんだよ馬鹿。」
「それは、行って良いってことか？」
「行って来い。マリアを外に連れて出たらすぐに後を追う。死ぬなよ。」
「よかったな。クロロ。」
「有難うございます・・・。」
（ありがた迷惑ってこういうことを言うんだろうな。て言うか、騙してる僕ってものすごい悪人見たいじゃないか。）
「相棒を頼むぞ、クロロ」
「はい。」
（こうなったら絶対生きて帰らせなきゃ。ついでに魔石も。）
「はいって、俺一応年上なんだけど。」
「じゃあな！」
「待てってまだ話は・・・っち帰ったら覚えてろ。行くぞクロロ。」
「はい。」

こうして余計な心配事が増えたクロロもといクロムだった。

「なあ、クロロ結局、陰影草ってどこにあるんだ？」
「前は最下層に生えていましたけど。」
嘘じゃない。三年前にも来たことがある。
「じゃ、とりあえずこの階段は下りたほうがいいか」
と言いながら二人が足を踏み出さないのは、階段を埋め尽くすラッディクオークの所為だろう。
「別の道探しますか？」
「いや自体は一刻を争う。突っ切ろう。」
（妹が病気だ、なんて言い訳使わなきゃよかった。）
クロムは激しく後悔していたが、前の男はやる気満々で駆け下りようとしている。

（しょうがないか。）
「ジェスさん。」
「何だ？」
「今から僕が攻撃魔法を放つんでその隙に駆け下りましょう。」
説明している暇は無い。魔物たちの動きが激しくなっている。
「デリーグライトバースト！」
一瞬、坑道内が明るく照らされ、すぐに何も見えなくなる。暗くなったのではない、明るすぎるのだ。
いくつもの光の奔流が一本の太い光線となって、階段まで突き進み魔物の大群に突撃。それでいて尚、勢いは衰えない。終には魔物の大群を簡単に消し飛ばし、坑道の壁にぶち当たると大音響とともに大爆発を引き起こした。
「すげぇ。お前、魔法使いだったのか。」
「早く、行きますよ。」
（セインとか言う奴の前では使えなかったがこいつなら大丈夫だろう。）
ジェスの少年のようにはしゃぐ姿を見てそんなことを思ってしまった。
階段の下に下りると、さっきの魔法で空いたのだと思われる大穴が下の階までぶち抜いていた。
「ラッキーだったな。これで一気に下まで行けるぞ。それよりお前パーティ組まないか？」
（さっきの力を見ても何も主は無いのか？おそらく本当にいい奴なのだろう。）
「いえ、やっぱり村のことが心配ですから。」
「そうかー、やっぱり妹のことが心配だよなー。」
ジェスは村の部分を勝手に妹に変えて何やら頷いていた。
「おっと、危ねえ。飛び降りるぞ。」
「はい。」
僕は危なげなく着地したのだが、ジャスはこけてしまった。

「痛てて。確かセインは三階構造とか行ってたから、ここが最下層か。」
「はい、そのようですね。」
「だけどさっきまでの様子となんか違うなあ。」
さっきまでは、ライトや昔の道具が残ってたりだとかしてたのだが、今はやけに通路が広い。それに筒状に伸びている。
その時、僕は脳髄にピシリと来るものがあった。
「ジェスさん。ライアントクオークですよ。」
「らいあんとクオーク？絵本かなんかか？」

『グギュオオオオオオ』

「あれですよ、あれ」
「何じゃありゃ、気持ち悪すぎ！」
「と、とりあえず逃げますよ！」
そこには先ほどまで倒してきたラッディクオークをでっかくして足をさらに付け足したようなものがいた。実際に見えるのは巨大な複眼と顎の牙だけだがゆうに幅は十メートル以上長さは一キロを超える者もいるという。
顎の破壊力は中級ドラゴンを凌駕する地中最強最大の虫。ラッディクオークの雌が何らかの影響で、百年以上生き完成体となった姿。繁殖力が非常に高く巣を荒らすものに対してはきわめて凶暴。『地中の女王』誰がそういったか知らないが討伐ランクＡ＋の魔物だ。
「かなり怒ってるよー。」
「あれだけ子供殺せば無理も無いな。」
「ど、どうします。」
「さっきの魔法は？」
「こんな所で使って岩盤が崩れたらどうするんですか！！」
「さっきのはなんだったんだよ！」
「あれは魔物だけに当てるように絞る時間があったからですよ。」

『グギュオオオオオ』

「戦意が萎える。あの声聞いてるとー！！」

「僕ら死にますよー。このままじゃ！！」

（ライアントクオーク。想定はしていたが、まさか巣の真ん中に出るとは・・・どうするどうする。）

「どあしゃー。」

「っちょ、こんな所でこけないでー」

「クロロ、俺のことはもういい先に行け。（笑）」

「何笑いながら行ってんですかー！！」

「それは、俺はこんな所死なんと言うことだ！ライオンとクラークだかなんだか知らんが覚悟しろ。」

なんと、ジェスはオノを振り上げるとそのまま突進していった。

「こんな小回りの利かん所で俺に挑んだのが間違いだったな。くらえ！！」

ジェスは牙が届く直前で斜め前に跳躍、ライアントクオークは避けるにも牙を振り回すにも狭すぎた。

バキッ

ライアントクオークの眉間に直撃。

「時間は稼いだぞ。今だー。」

「は、はい。デリーグライトバースト！！」

（まさかあの状況で攻撃できるとは。）

光の奔流が一本の束になり眉間のヒビ一点に集中。

ピキキキ・・・

殺ったか？

パリン

表面を覆っていた。殻が崩れだしその下から白い殻が現れた。おそらく冒険者達はこの姿を見てこう呼んだのだろう。『地中の女王』と。それほどまでに純白に輝く姿は美しかった。光届かぬこの地中でそこまでの美しさを持つ必要はあるのかと思うほどに美しかった。

「こいつホントはこんな姿だったのかよ。」

「そのようですね。」

ライアントクオークは本来あらゆる地を巡り子を産み落とす。一所にとどまる事は無い。それ故ラッディクオークが増えすぎることは無い。気性もきわめて温厚で、ドラゴンと同じように非討伐魔獣に指定されている。

しかし、今回のケースのようにライアントクオークが大量の魔力を体内に取り込むとライアントクオークは凶暴化し一所で生活するようになる。今の外郭はその不要な魔力を排出するさい皮膚上で結晶化したもの。そのため魔力が体外に排出できず体内に留まるようになる。そうなった場合今の様に殻を割ることで正常に戻る。ライアントクオークの討伐とはそういうことだ。しかし、これはライアントクオークが殺されかけたことを意味する。だが、まあ・・・

「これで、生態系も元に戻るでしょう。」

『キュルルルルル』

ライアントクオークは穴を掘り始めた。

「ちょい、待てこらー逃げるきかー。」

「いいんですよ、ライアントクオークの場合これで討伐したことになるんで。」

「マジか？」

「はい、この殻を持って帰ればＯＫです。」

「以外にあっけなかったな。」

「まあ、僕の魔法攻撃があればこそですね。」
「言うなあ、お前。そういえば陰影草。」
「これですよ。」
さっき、無人採掘機を使っていたことは内緒だ。もちろん魔石も入手済み。
「いつの間に。」
「さっきですよ。」
「ま、いっか。」
しばらく、洞窟内には二人の笑い声が響いた。

「よう、セイン」
「ジェス無事だったのか。」
「何とかな。」
「クロロは？」
「妹のことが心配なんだってよ。」
「手のそれはもしかして・・・」
「ああ、それが聞いてくれよ。実はなあ・・・」
セインはジェスの擬音効果だらけの説明に時々口を挟みながら聞いていた。
「それでよう、俺の大活躍でライアントクオークの殻がドバーと。それでめでたしって訳さ。これがその殻なんだが、クロロは分け前も要らないんだとよ。きっと礼のつもりなんだろうが・・・」
「まあ、良いじゃないか。それよりクロロが唱えたって言う・・・」
「デリーグライトバーストか？」
「ホントにそういったのか？」
「ああ、あれはすごかったよな。俺の決死の攻撃の次にすごかった。うん」
しかし、セインはジェスの話を聞いていなかった。
（光魔法の中の上級魔法を杖なしで二度も使えるとは。黒いコートに光魔法、あのゴーグルは灰色の瞳を隠すため・・・クロロは魔王

なのか？・・・だが、なんだかんだで最後までジェスを守ってくれたようだし、ジェスが助けたいと言うような奴だ。根はいい奴なのだろう。）
このあとセインは小一時間ジェス武勇伝とやらを聞かされるのだが、それはまた別の話である。

クロロいや、クロムは西に向かうことにしていた。
「なかなか、いい奴だったな。」
最後まで嘘を信じてさらに助けようとしてくれるとは思っても見なかった。
「あれで礼はできたかな？」
クロムは顔に軽く笑みを浮かべると西へと歩き出した。

第二章　地中の女王（後書き）

これで臨時パーティは解散です。次回はそろそろクロムに魔王らしいことをやらせようと思います。

第三章　断れないお願い（前書き）

文字数がばらついてすみません

第三章　断れないお願い

今、僕はガトレア帝国西部カンタス渓谷に来ている。正確に言えばカンタス砦付近だが。

ここは、大国ルディア王国との国境に面しており、ガトレアにとってはここは重要な意味を持つ。

なぜなら、大陸南西部においてトップクラスの軍事力を誇るガトレアから見ても、ルディアと戦えば負けかねない。今は同盟を結んでいても、もし戦争になった場合の基地となるカンタス砦は最初の防衛ラインとなるわけなので、ガトレアが気にするのも無理も無い。

しかし、同盟を結んだ手前ルディアが侵略してきた時のことを考えてこの地に要塞などはできない。もし仮に要塞を築くと友好関係が崩れるとは言わないが、何らかしらの影響はある。もちろんガトレアはそのような事態を避けたい、しかし砦の防衛力を考え要塞は築きたい。と言う訳でガトレアは極秘に要塞の建設を行っている。以上が情報屋から聞いたものである。

要塞を築くのに人員を割いて、国境境の警備が疎かになっている隙に、僕はルディアに行こうと言う訳である。

さすがに五年も旅を続けていれば、国内をまわり尽してしまう。なので、ルディアに行きたいなと思っている所へこの情報。まさに千載一遇のチャンスと思ったわけだ。

現在、激しく後悔中である。

「だから軍の者じゃないって言っていますよね、さっきから。」

「じゃあ、なんでここに来たんだ。今、関所の通行許可を得られるのは軍の者だけだ。なのに通行許可も得ず、しかも理由がルディアに行くためとはおかしいだろう！さあ、軍はいつここを潰す気なんだ。」

少し前のことである。

僕がカンタス渓谷を歩いていると、急に男達に拘束されて今に至る。
どうやら軍は要塞建築のために僕が今いる村を潰す気らしい。渓谷の高い位置で尚且つ下のほうから、つまり関所を通ってきたルディア国民から見えない。さらに空からの攻撃に対応するための砲台設置可能な場所が大量にある。非常に要塞に都合のいい場所である、この村は。
しかし、もちろん村民は村を捨てる気は無いらしく、どうも軍から村を守るために戦う気らしい。
ホント無謀だ。
と言う訳で軍の人間に間違えられた僕はこうして尋問されているわけである。
現在いる部屋どうも急きょ尋問室となったらしく、そこら辺の民家と変わりない。もっと言えばガトレア国の税金はかなり高く、したがって国民の生活水準は低いため、普通の民家といってもボロイ物置のようなものだが。
もういっそのこと魔法を使おうか（武器はもちろん取り上げられている。）と何度目かに思ったとき村人が入って来た。
「おい、ガイ村長がこいつと会いたいそうだ。」
「本当か？何だってこいつに？」
「さあな、お前そう言うことだついて来い。」
僕は大人しくついて行くと、さっきよりは豪華な村長邸らしき所に連れてこられた。大きな違いは部屋数か、さっきは一部屋しかなかったし。
中に入ると、村長といかにも毎日鍛えてますって感じのごつい男が立っていた。
「よう、来なさった。座りなさい。」

僕は村長の両隣に立つごつい男を多少警戒しながら胡坐をかいた。
「あんた、もしかしてメンテイン家の者か？」
「いやー、僕はただの観光客ですよ。」
「ただの観光客がこんな物を持っているのはおかしいじゃろう。」
そう言って僕の双剣を見せてくる。
「最近は魔物も多いですから。」
「ハシはこれでも昔は魔具士をやっておってな。しらばっくれても無駄じゃ。少なくともこいつを買うにはシエル金貨五百枚はいる。」
ハシってまあ良いが。
「五百枚なんて、僕が心血注いだ作品だ！！そのぐらいで渡せるかって、あぁ」
しまった、この村長謀ったのか。
「やはりそうなのじゃな。とするとあいつのいやメンテイン・チェスターの息子か。なんとなく術式の組み方が似ておる。」
この爺さん、親父の知り合いか？
「奴から聞いておらぬか、ハシの名を、構築のTの二つ名を」
「T・ハシル、親父の師匠か！」
構築のT　は、その段階を踏んだ術式強化術『Tシステム』を開発した時につけられたもの。
その二つ名は、かつて大陸南西部では知らぬものはいなかったほどの腕前だ。時代とともに忘れられたが。
「なに、奴には基礎を教えたに過ぎない。今では奴のほうが技量は上じゃ。」
ただの老人だと思ったら実はとんでもない奴だったというわけである。
「構築のTとも呼ばれるあなたが僕に何のようですか？」
「わしらに協力してほしい。」
「何をですか？」
「奴の息子と見込んでのことじゃ。あの砦から兵士を撤退させてくれ。」

村長は頭を下げて頼んできたが・・・
「お断りします。」
横の二人が何事か言おうとしたが村長はそれを止め、僕を放してくれた。

村長が嫌いな訳ではない。むしろ尊敬している。だが、どうしても親父の息子としてって言うのは譲れない。つまり、村長は僕の実力ではなく、親父のことを信用して頼んでいるのだ。そこが気に入らない。
村民は嫌悪のまなざしを僕に向けているが僕は黙って歩いた。

「お兄ちゃん。」
急に呼び止められ振り返ったが、そこには何も無かった。
「お兄ちゃん。」
そこには少女がいた。下から声がする。あわててしゃがんで聞いた。
「なんだい？」
「お兄ちゃん強いの？強いんだったらお父さんを助けて。このままだとお父さんが行っちゃう。」
どうやら、軍との戦いにはこの子のお父さんも行くらしい。
「お願い。」
目に涙をためてお願いされてしまった。これを断れる奴がいたらお目にかかりたい。
「分かったよ。」
実は断っておきながら勝手に行こうとか思っていたのだが、僕の心は決まった。何よりこの子は僕に頼んでくれた。
僕は村に背を向けカンタス砦に向かった。

第三章　断れないお願い（後書き）

いよいよ次はカンタス砦に殴りこみ。次回でクロムの双剣について書きたいことがすべて出せると思います。それから小説の投稿間隔についてですが、プロローグ～第一章、一日、第一章～第二章、二日、第二章～第三章、三日となっています。これ以上広げないよう頑張ります。

第四章　ミッション　カンタス砦を攻略せよ上

「困った。」

僕はカンタス砦前まで来ている。一人でだ。

村長さんの依頼を断った手前救援を頼めないのもあるが、一緒についてこられると足手まといになるだろうと思ったのもある。

砦は構造的に千人駐留可能なのだが、食料や水などの保管の関係上実際は五百人までしか無理だった。

五百人ぐらい、何とか忍び込んで司令官でも何でも人質に取れば退却に追い込めるのではないかと思ったのだ。

目の前にそびえる高い金属質の壁、砲台がいくつも取り付けられている。おまけに絶え間なく巡回する警備兵。

関所でもあるカンタス砦は、カンタス渓谷を塞ぐ強大な門のことである。

つまり、門の左右の柱部分に砦が植え付けられているのだ。扉部分も砦の一定階層ごとに渡り廊下と部屋が取り付けられている。もちろん開けば使用できないが・・・

『ガトレア西の門』その姿は壮観だった。まさに壁である。

通常は門が僅かに開閉した状態なのだが、今は閉じられて通行禁止状態である。

司令室は一番上にある。入り口は左右に二つ。どちらも見張りがいる。

つまり、砦に忍び込むには夜のくせに昼間のように照らされている真平らな赤土つちの地面を門上部の見張りなどに気がつかれずに横切り、入り口の見張りを気絶させ、五百の兵士の視線を掻い潜り

司令室まで行かなければならない。

「ま、やるしかないか。」

以外にクロムは楽観主義だった。

なにやら、円盤のようなものを取り出すと辺りにばら撒いていった。

「術式解除」

その声と共にあちこちで魔術が発動する。

光の閃光は門に直撃したが傷一つつかなかった。

さすが、軍事国家ガトレア対応が早い。

すぐに、入り口と小門が開き兵士達が出てくる。さらに発射地点への砲撃。

しかし、遅れて目くらましの術式が発動する。

その隙に僕は小門から中にもぐりこんだ。

「ぎりぎりだったな。」

さっき使った円盤は時限式の魔術発動装置である。あまり多くの魔力は込められないが、こういう作戦にはぴったりだ。

中に入って僕はすぐさまコート袖の術式を発動した。いつか使った光の魔手である。

それで、向かってくる兵士達を投げ飛ばす。

（かなりの数がでてったと思ったのだが・・・階段さえ見つければあとは上までいける。）

階段が螺旋状であることと司令室の場所は覚えていたが、階段の把握までは時間が無かった。

兵士をなぎ倒しながら奥へ奥へと進んでいく。やがて湾曲した壁を見つけた。

「デリーグライト」

穴からは階段がのぞいていた。

（やはりか・・・）

階段を上ろうとしたが上から兵士達が降りてくる。先ほどまでとは違い完璧に武装していた。どうやら完璧にとりで内に侵入者が入ったと伝わったらしい。

忍び込むとは程遠い物になったが、魔手を巧みに使い階段を駆け上る。

三十五階分の高さを疾走したのだ。疲れることこの上ない。

しかし、お陰でようやく司令室まで来れた。

真ん中に置かれた大きな机に男が一人座っていた。それ以外に人影は見当たらない。

「お前が司令官だな。」

「そうだ。まあ、警戒するな。わたし以外に人はいない。」

「何のつもりだ？」

「何のつもり？そっちこそ何のつもりだ。魔王。いや、言わなくても分かる。要塞建設計画を潰しに来たんだな。」

クロムは答えなかった。

「お前は、まず国家に多大な資金、つまり闇ルートで特別税を払い国家の黙認を得て活動する盗賊団の中でも最も資金を多く提供していた破弓の盗賊団を潰した。最初はそこまで重要視していなかったが、お前はまるで国家に力を誇示するようにハルナード信仰の聖獣であるドラゴンを倒し、トップシークレットである魔道人形の研究施設の場所を突き止め、そのまま我が国との交易が深いアクリナ国へ亡命した。我らはお前が研究所をアクリナに教え関係を崩すつもりだと考え、お前をアクリナがかくまっているという事実を作り上げ先に戦争を仕掛けようとした。しかし、お前は王都に出現し駐留

していた一個小隊を壊滅させた。お陰で結果的に我らとアクリナの関係は崩れ交易は一時的に停止し、魔道人形研究は計画から大幅に遅れることとなった。その頃お前を重要視し始めた上層部は事実を隠蔽しお前を犯罪者に仕立て上げた。事実を知る少数の民衆たちはレジスタンスを結成しお前のことを影の解放者と呼んでいるそうだ。そんな、テロリストが要塞建設の計画を聞けばやってくるのは我々にも十分予測できた事態なのだよ、魔王。」

クロムは驚いていた。何故ならテロリストとか初耳だったし自分の行動がそんなふうに捉えられていたなんて知らなかった。

自分はたまたま、アクリアに向かう途中厳戒態勢のしいてある建物を偶然見つけただけだし、自分のせいで戦争とかシャレにならないので王都に戻って大きな事を起こしたりしただけなのだ。

「いや、僕はテロリストとかじゃなくてですね」

司令官は机の上のマイクを起動させた。

「タイプCのトラブル発生　タイプCのトラブル発生　直ちに撤退せよ」

そして、司令官はボタンを押して逃げた。

「お前はもう終わりだ。」

何のことか分からなかったが、とにかく撤退させれたんだから良かったのか？

しかしまだ終わりじゃなかったのだった。

第五章　ミッション　カンタス砦を攻略せよ中（前書き）

わけあって遅くなりました。次回はモット早く登校できたらいいな

やっぱり無理

かもしれません。

第五章　ミッション　カンタス砦を攻略せよ中

グゴゴゴゴゴゴ
背後からあまり聞きたくない音が聞こえてきた。おそらくあの司令官がいかにも怪しい赤いスイッチを押したせいだ。
　そう、そこに居たのは魔道人形だった。
「まさか、もう完成していたのか。」
魔道人形は腕を持ち上げてこちらにビームを放ってきた。僕はとっさにコートの付属効果である障壁を発生させる。
何とか持ちこたえたが、砦の損壊がひどい。おそらくガトレアの狙いはこうだ。この砦と一緒に僕を消す。そうすれば、魔道人形の実地訓練、危険分子の排除さらに砦が崩れたことを言い訳にルディアに対して堂々と新たな砦大規模な建設ができるとまさに一石三鳥な訳である。
なかなか考えたものだ。しかし僕もそう簡単に死ぬ訳には行かない。ようやく双剣を抜くと魔道人形に近接戦を挑むことにした。正直あのビームをそう何度も防ぎきる自信が無い。
人形の下腹部のジョイントにあたる部分に爆発を叩き込む。
前方への爆発が終息を迎えたとき僕は見た無傷の奴の姿を
正確に言えば装甲に多少の損傷も見られたが、動作に関して何の影響も与えてないように見えた。
「これ以上の攻撃となるとあれをやるしかないか……」
人形打撃やらビームサーベルやらおそらく１６ｍｍの散弾やらを避けながら、僕は魔力を込める。
「音声認証　モードチェンジ　パシッブモード　開始」
双剣が合体変形して長大な大剣へと変貌を遂げる。合体変形って響きがいいな。
とにかく僕は大剣を振り上げ人形の頭上に振り下ろす。それと共に大爆発が起こって人形の半分以上を吹き飛ばした。ついでに床まで

吹き飛ばした。いまさらながらここが三十六階だということに気づく。

さて、どうしよう。

少年は以外にも冷静に（腕組みまでして）落ちていった。

第五章　ミッション　カンタス砦を攻略せよ中（後書き）

ハイすみません。短すぎますよね。今回は双剣の隠された能力について書きたかっただけですから。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3662g/

不本意ながら魔王やってます

2010年10月14日17時38分発行